

佐藤清明資料保存会会報

No.13



博物学者 佐藤清明 (1905-1998)

佐藤清明資料保存会
里庄町立図書館

2024.12.21.

会報第13号 もくじ

1. あいさつ	佐藤清明資料保存会 会長 加藤泰久	1
2. 巻頭論考 南方熊楠と佐藤清明の交流	田辺・南方熊楠翻字の会 大内規行	2
3. 調査報告 虚空蔵山の植物 ～旧里庄美しい森を中心に～	理事 岡本泰典	16
4. 資料		23
① 地元紙「山陽新聞」に掲載された「キクザクラ保存育成活動」にかかる 紹介記事と読者投書欄「ちまた」に寄せられたメッセージ		
② 第74回全国植樹祭天皇皇后両陛下お手植え苗木の定植地		
5. 編集後記		23

表紙写真：第六高等学校理科教室助手時代の佐藤清明（20代）

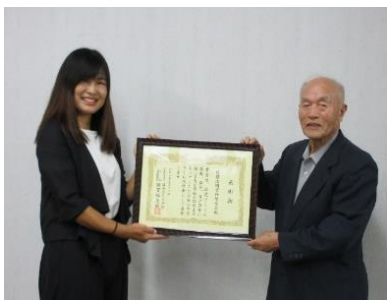
あ い さ つ

佐藤清明資料保存会会長 加藤 泰久

早いもので、もう1年がたちます。今年の夏は特に暑く、連日のように熱中症警戒アラートが発令されました。体調を崩される方も多く、日常生活に大きな影響を及ぼしました。つい先日まで紅葉が見ごろでしたが、12月の中旬を過ぎてから、ようやく例年通りの寒気が入ってきました。ここ数年来、確実に気候の変化を肌で感じています。

今年を振り返ってみますと、5月には天皇皇后両陛下ご臨席のもと、岡山県で全国植樹祭が盛大に開催されました。会場では「菊桜」が皇后陛下により植樹され、大変感激いたしました。この植樹祭に併せて、幼稚園、小・中学校等町内8か所に菊桜の記念植樹をしました。これからの成長が楽しみです。9月には「公益財団法人日本さくら会」から、さくら功労者として「佐藤清明資料保存会」が受賞の栄に浴することができました。これも会員皆様のごこれまでの取り組みのお陰と感謝を申し上げます。その折に、同じく受賞された石川県の氣多（けた）大社の「氣多の白菊桜」を知る機会があり、あらためて種の多様性を感じたところです。10月には皇居東御苑の桜の島で「菊桜」を確認することができたので、開花の季節に訪れてみたいと思っています。11月には全国の町村の中で、里庄町と共通の課題を抱える小規模自治体の町村長の研修会がありました。そこで高知県佐川町長と名刺交換をした際に、名刺に「牧野博士のふるさと」と書いてありましたので、牧野博士と佐藤清明さんの関係について話をすることができました。佐川町長からはNHK番組「らんまん」の撮影時の話などをお聴きすることができました。今後、何か交流の機会があれば新しい発見があるかもしれません。

今年も、会員皆様のご協力と活動により実り多いものとなりましたことに心から感謝申し上げます。来る2025年が会員皆様を始め、町民の皆様にとりまして健康で明るいものとなりますようお祈りいたしますとともに、引き続き、佐藤清明資料保存会に対して、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



佐藤清明資料保存会は、「日本さくらの会」から、「さくら功労者」として表彰されました。令和6年9月16日、加藤泰久会長が授賞式に出席いたしました。

同会は、1964年東京オリンピックを記念して、「さくら」の愛護、保存、育成、普及等を目的として設立された公益財団法人で、「さくら」の植樹や愛護、「さくら」名所の保全、名木・巨木保存、「さくら」を通じた国際親善活動等を行っています。

(写真：表彰状を手にする稲田多佳子副会長・生宗脩一名誉会長)

南方熊楠と佐藤清明の交流

田辺・南方熊楠翻字の会

元大阪府中学校理科教諭 大内規行

はじめに

南方熊楠（1867～1941）は、博物学、生物学、民俗学の分野で活躍し、神社合祀反対運動の最中に書かれた書簡『南方二書』で今日的「エコロジー」の先駆者とされる。その生物学では、黎明期の粘菌（変形菌）分類学を牽引し、民俗学でも「十二支考」をはじめとする多くの論考がある。一方、佐藤清明（1905～1998）は、岡山の高校、大学で教鞭を執るかたわら、戦前は植物方言・妖怪等の民俗学から植物、粘菌、動物に及ぶ幅広い分野で調査研究を行い、戦後は研究会活動や県内の天然記念物等の調査・保護に尽力した人物である。粘菌には「変形菌」と「粘菌」の二つの呼び名がある。ここでは南方熊楠（以下、熊楠）が使っていた「粘菌」を使うことにする。

私は現在「田辺・南方熊楠翻字の会」に参加し、翻字等に関わっている。熊楠は、頻りに手紙のやり取りを行っており、その発信と受信の日時や相手などを詳細に日記に記録していた。「佐藤清明（以下、佐藤）」という今まで聞いたことがない名前が何度も登場する時期があった。一体どんな人物だろうかと調べていくうちに、『佐藤清明資料保存会』の存在を知った。ますます興味が湧いていた頃、貴保存会が『博物学者佐藤清明の世界 附録「現行全国妖怪辞典」』を出版することを知り、発売と同時に購入し、じっくり読ませていただき、大変参考になりました。その後、熊楠の日記や書簡を調査し、拙稿「日記書簡にみられる南方熊楠と佐藤清明の交流－粘菌学指導を中心に－」（『熊楠研究 18号』、2024）をまとめることができた。この度寄稿させていただく文章はその拙稿をもとに新たな資料も加え、書き直したもので、ぜひ読んでいただければ幸いです。

1. 熊楠日記の特徴

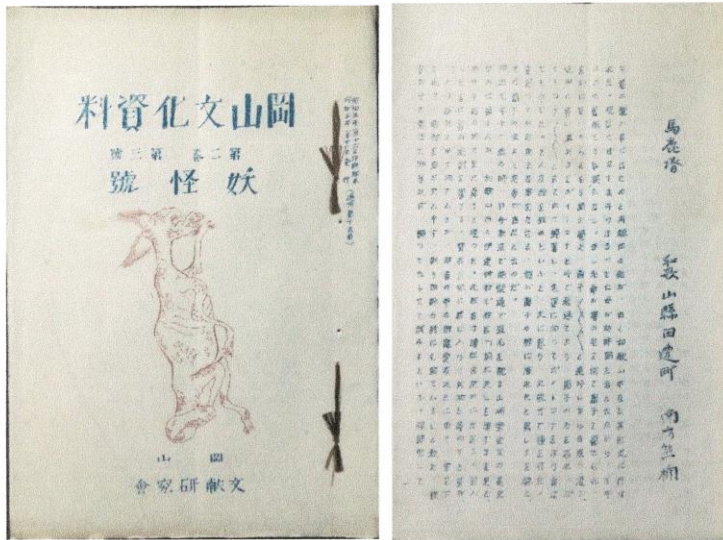
熊楠は大学予備門に入学した頃から日記を書き始め、明治・大正から昭和16年に亡くなる直前まで日記を書き続けた。熊楠の日記の特徴を一言で言うと、出来事の記録に徹していることである。天気、起床、就寝、街で会った人物、来客、研究作業、郵便のやりとりなどが時間とともに淡々と書かれている。また庭の植物の開花、カメなどの生物記録、地震、興味を持った新聞記事なども記録されている。それらの記述に内面的な感情や感想などはほとんどが書かれていない。一方、論考や書簡では思想や感情が書かれたり、場合によっては誇張や脚色を含んだりするのが特徴である。したがって日記は事実関係を確認するのに極めて信頼できる資料となっている。

2. 熊楠と佐藤の出会い「川島河の^{みづち}虬」がきっかけ

なぜ和歌山と岡山の地方にあった者同士が会ったのか。その出会いはいつだったのか。私はまず熊楠の日記で「佐藤清明」の記載が一番古いのを探した。すると下記の一文が見つかった。

[発信]夜十一時出 佐藤清明 状一「虬に就て」 岡山県浅口郡里庄村 （1930年1月21日日記）

これが時系列的に早いと言うことだけでなく、住所が名前の近く書き入れられている場合、その住所の主は初記載のことが多い。したがってこの記述が「佐藤清明」の初出とってよいと思う。その内容は「虬に就て」であり、熊楠が「虬」に関して何か問い合わせを行ったと思われる。「虬」とは、佐藤が『岡山文化資料』2巻3号に寄稿した「吉備国川島河に於ける虬」のことである。つまり、二人の出会いは、熊楠が「虬」に関する手紙を出す形で始まった。

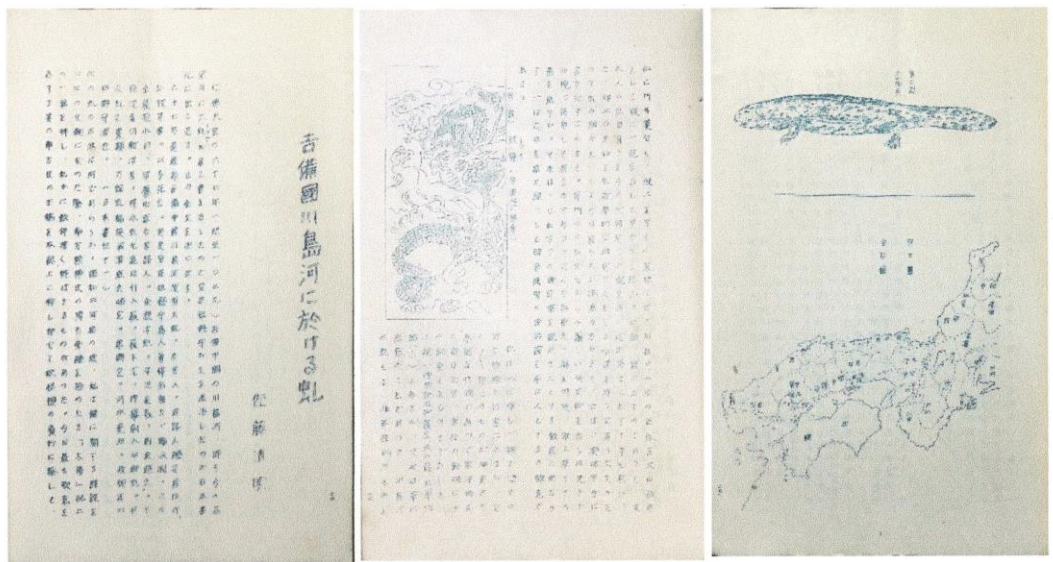


上 2 枚は『岡山文化資料二巻三号』（1930）の表紙と南方熊楠「馬鹿婿」の一部（個人蔵）

『岡山文化資料』は、岡山の習俗や方言、伝承などを集めた雑誌で、桂又三郎（1901～1986）や島村知章（1896～1930）らが中心となって 1928 年に創刊された。熊楠は桂からこの雑誌を創刊号より寄贈されていて、自分が寄稿した「馬鹿婿」が掲載された『岡山文化資料』が届いたと 1 月 19 日日記に書いている。その号は、熊楠の論考と佐藤の論考が同時掲載であったことから、同じ岡山で桂とともに活動していた佐藤は、熊楠の『太陽』誌上での「田原藤太竜宮入りの譚」を読んで感銘を受けていたこと、またこの「無駄な一編」を「敢えて草する」のは「熊楠氏の御寄稿を歓迎せんとする微意に他ならず」と書き表し、論を進めたの

である。

岡山県の川島河（現在の高梁川）で道行く人を毒で苦しめる大虬が、^{あがたもり} 県守に退治された話が日本書紀にあり、佐藤はその虬（一般に虬とは龍のようなものとされ、その正体はいろいろな動物がもとになってでき



上 3 枚は『岡山文化資料二巻三号』（1930）の佐藤清明「吉備国川島河に於ける虬」の一部（個人蔵）

た想像上のものと考えられる）の正体を大山椒魚とし、その根拠として、熊楠の「田原藤太竜宮入りの譚」から、「ミヅチは水蛇、野蛟は野蛇の靈異なるを崇めたものと思う」を引用し、虬は本州では水蛇とすれば最も的を得て居るが、この川島河には水蛇はいないから、大山椒魚説も「野次として割り込む余地が無いことはない」と論じた。加えて川島は現生息地に近い、「その形は巨大、醜悪、十分奇怪化し得る」、「その習性は暗愚、且つ鈍重、凶暴で」、湯原では退治伝説もあり、ドイツではかつてその化石が人類と誤られたエピソードも紹介し大山椒魚説を述べた。その論考を読んだ熊楠が大山椒魚説に関して何らかの問い、あるいは教示を行ったと思われる。

最近、貴保存会の生宗脩一氏（杉井睦保氏の研究テーマ資料）から「佐藤清明著『龍の話』（1928）」の論考をいただいた。これを読めば佐藤が龍についてどれほど深く調べていたかがわかる。その章立て

は「龍とは何か」「龍の名義」「文献に見ゆる龍」「龍の伝説」「印度の龍」「各国の龍」「龍の表徴」「龍の正体」からなる。「龍の正体」では天変地異やは虫類のイメージが組み合わさり、龍という神聖な存在が生まれた過程がまとめられている。この中の [10] の節では日本書紀の「川島河の大虬」の話を紹介し、「この考証は他日発表す」と予告があり、すでに「吉備国川島河に於ける虬」の構想があったとわかる。佐藤がこのように「龍」の研究をしていたからこそ、説得力ある「吉備国川島河に於ける虬」の文章が書けたのだと納得した。

次は熊楠の最初の手紙から 6 日後の日記の一文である。

[受信]朝八時半着 佐藤清明 状一 二十五日出 及岡山文化資料別刊 一通 (1930年1月27日日記)

今度は佐藤の方から手紙が届き、岡山文化資料別刊の寄贈があったことを示している。このように交流は始まり、この時熊楠は 63 歳、若き佐藤は 25 歳であった。

一方、日記によれば熊楠は桂から『岡山文化資料』創刊号を 1928 年 12 月 3 日に送られている。しかし、書簡などのやり取りに関しては桂が最初の寄稿(『馬鹿壻』)を依頼した 1929 年 9 月 27 日に始まったと言ってよいだろう。1928 年から 1934 年の日記を見ると、桂からの来簡となる「受信」の記録が 54 回、桂に宛てた「発信」の記録が 17 回を数える。これは熊楠が岡山に関する質問や資料の問い合わせを行い、桂もそれに応え、資料の提供を行ったことを示している。南方熊楠顕彰館が所蔵する岡山県関係資料は、桂や佐藤から寄贈されたもので、その数は 60 点を超える。

3. 粘菌による熊楠と佐藤の交流

下記の書簡は 1930 年 11 月 30 日に桂が熊楠に送った手紙の一節である。文中の「本会」とは桂が主催する「岡山文献研究会」のことである。

又御多忙中にも拘わり^(マ)ませず、私共に再び御寄稿下さるとの御事誠に有り難く厚く御礼申上げ候。次に粘菌の件採集して御送付致す可^(マ)けに候へば、本会へ御下命下され度、御希望の條件に副ひ細心採集可仕候

(〔来簡 1408〕熊楠宛桂書簡：南方熊楠顕彰館所蔵)

再寄稿のお礼を述べた後、粘菌に関しては採集して送付できるので本会へ「御下命」があれば、「御希望」にそうべく採集できるとの返事である。おそらく熊楠が前信で桂に粘菌採集を依頼していたのであろう。桂に対してなされたこの依頼は、早速佐藤にも共有されたと思われる。生物学の教師として佐藤自らが進んで粘菌採集への協力を引き受けることになったのではないかと想像できる。この話の 1 年ほど後になるが、佐藤は生徒、教師、社会人向けに執筆した『博物科叢話』(1932)の中で、粘菌という生物を説明し、日本人研究者ではただ一人南方熊楠を紹介し、同時に昭和天皇が発見した粘菌 2 種の名も示したほどであったから、粘菌に対して強い興味を持っていたことは間違いない。この書簡での依頼と粘菌を知りたいとする佐藤の意気込みとが合わさって、二人の交流は粘菌が中心になっていったのではないだろうか。それらを確認できるはずの書簡の多くはまだ未発見だが、1931 年の 7 月 19 日日記の「〔受信〕朝九時四十分着 佐藤清明小包一粘菌二種」を皮切りに佐藤から南方への粘菌送付は始まった。(「粘菌送付」の詳細は、第 6 章で述べる)

4. 熊楠と粘菌、及びその業績

(1)粘菌とは

熊楠の粘菌に関する業績を知るうえで、生物としての粘菌について簡単に述べておきたい。

春になると、粘菌の孢子から変形体と呼ばれる単一の細胞が現れる。この変形体は、数え切れないほどの核を持ち、手のひらよりも大きくなるまで成長する。変形体は落葉や枯れ木のバクテリアやカビを栄養源とし、アメーバ状に動きながら活発に活動する。梅雨口から秋口にかけて、小さなキノコのような子実体に変身し、この子実体は数え切れないほどの孢子を含んでいて、風に乗って散布され、生息地に落ちて新たな世代が始まる。子実体の色や形は多種多様で、現在、世界では900種以上の粘菌が知られていて、日本で約600種が報告されている。粘菌は、以前は菌類と考えられていたが、最新の分類では原生生物に属している。

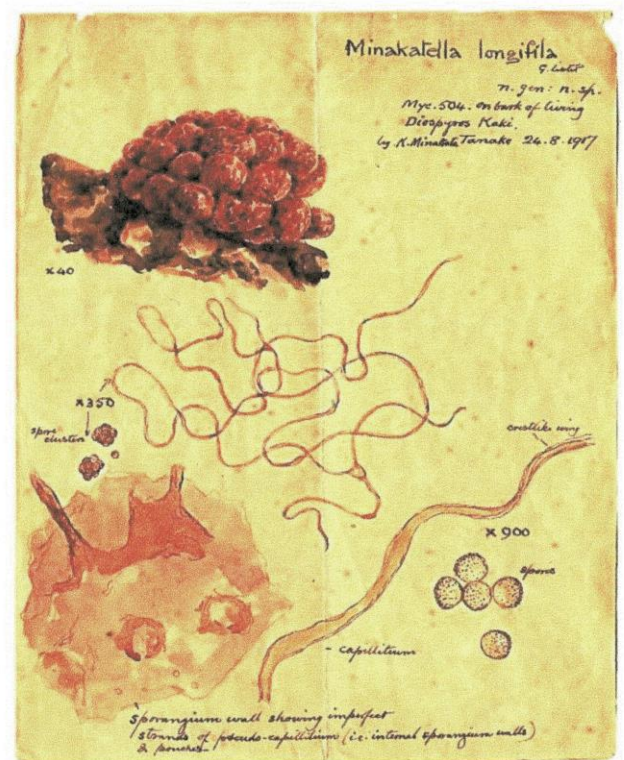
(2) 熊楠が行った粘菌に関する調査・研究、および業績

私はもともと粘菌学に関しては門外漢であるが、熊楠が粘菌をどう採集し、どう調査し、どのように発表したか、それらをまとめたのが次頁の「南方熊楠粘菌関連年表」である。粘菌の呼称は日記や資料中のもので、当初「ミセトゾア」、「変形菌」、「Mycetozoa」であったが、1906年から「粘菌」と「変形菌」が併用して使われ、1909年から「粘菌」のみになった。

また、松本淳(2007)は南方熊楠が粘菌分類学に残した業績を次のようにまとめている。

- (I) 共同研究者らとともに日本各地で粘菌を精査し、196種を確認し、目録として公表した。
- (II) アカフシサカズキホコリ、ミナカタホコリ、アオウツボホコリ、キモジホコリ、イボヌカホコリなどの新種・新変種を発見した(ただし、イボヌカホコリ以外には、南方の名前は記載者名に上がっていない)。
- (III) 生きている木の樹皮だけに生育する粘菌の存在に世界に先がけて注目した。
- (IV) 変形体の色に関する研究を行い公表した。
- (V) 研究者だけでなく多くの市民にも粘菌分類学を教育した。

明治の末、日本で生息が確認されていた粘菌数は18種だったが、1927年に公刊された目録では196種になった。それらは熊楠の業績であるが、リスター親子との協力関係は熊楠の研究を大きく前進させる上で不可欠なものであった。20年にわたるリスター親子との交流が途絶えた後、熊楠は新種と思われるものを発見してもそれを正式に登録することはしなかった。



G.リスターから贈られたミナカテルラ・ロンギフィラの図(南方熊楠顕彰館所蔵)

5. 佐藤との交流が行われた時期の熊楠

現時点の資料に限れば、二人の交流は1930年から1936年の間である。佐藤から熊楠への書簡等(小包を含む)は40回、熊楠から佐藤に宛てた書簡は20回を数える。1931年が最も頻繁で、次に1932

〈南方熊楠粘菌関連年表〉

2024年10月16日 大内規行作成

西暦	和暦	月日	粘菌研究・調査	根拠	★採集数/ 目録	熊楠の行動	佐藤清明関連
1887	明治20	107		別巻②		米国着	
1891	明治24	514	ミセトゾア1種（フロリダにて）	日記	1		
		622	「変形菌1種」（フロリダにて）	〃	2		
		923	変形菌6種（フロリダ・キューバの集計）	〃	6		
1892	明治25	621	羽山蕃次郎に粘菌採集依頼	書簡		9/26ロンドン着	
1900	明治33	1015		別巻②		神戸着	
1901	明治34	130	Mycetozoa(ミケトゾア)9種	日記	9	2/14孫文と和歌山で 歓談	
		719	Myc.(ミケトゾア)12種	〃	22		
1902	明治35	309	変形菌33種	〃		1/15那智山でラン採 集の小峠四郎と遭遇	
1903	明治36	1209	変形菌（和歌山34種＋熊野36種）70種	〃	70		
1904	明治37	924	変形菌（和歌山34種＋熊野48種）82種	〃	82		
1905	明治38	1119	ロンドン大英博物館へ標本47点送付→マリー→ ジュップ→A.リスターへ（1回目）	顕影館 資料			佐藤清明誕生
1906	明治39	610	変形菌リスター氏へ送付（2回目）	〃			
		1111	「粘菌」用語、使用開始（変形菌と併用続く）	日記			
		1223	変形菌リスター氏へ送付（3回目）	〃			
1907	明治40	428	新種の発見第1号（アオウツボホコリ）（リス ター鑑定）	〃			
1908	明治41		「本邦産粘菌目録」（植物学雑誌）74種	全集③	74		
1909	明治42	929	「変形菌」用語として最後の使用	日記			
1910	明治43	623	『ネイチャー』変形体の色に関する論文、日本産 粘菌86種にもふれる	英論考	86		
1913	大正2		「訂正本邦産粘菌目録」（植物学雑誌）108種	全集③	108		
1916	大正5	709	柿の生木上「ミナカテルラ」発見→標本は英国自 然史博物館所蔵/リスターへは1919.10.24送付	日記		転居/『田原藤太電宮 入りの講』（太陽）	
1917	大正6	1020	同じ木にミナカテルラ2度目発見→国立科博所蔵	日記			
1918	大正7	703	粘菌採集依頼（熊楠→小峠宛書簡）	書簡			
1920	大正9	823～ 904	1回目高野山植物採集（小峠、宇野、坂口、川島 同行）	別巻②			
		1119	新属新種「ミナカテルラ」（G.リスター未開）	書簡			
1921	大正10	1031	2回目高野山植物採集（熊楠同行）	〃			
1926	大正15		東宮御所90点進献・「本邦産粘菌諸属献上表啓」 （植物学雑誌）193種	全集③	193		
1927	昭和2		「現今本邦に産すと知れた粘菌種の目録」（植物 学雑誌）196種	〃	196		
1928	昭和3		川又・妹尾官林採集調査（10/16～翌年1/6まで）	別巻②			『龍の話』
1929	昭和4	601	神島行幸、長門艦上で進講・110点進献（熊楠）	〃			
		608	神戸で天皇へ進講・150種進献（小峠）	〃			
1930	昭和5					佐藤清明と交流始ま る	『富嶺川島河に於ける 札』を寄稿
1931	昭和6			日記			熊楠に粘菌送付7/19、 10/15、10/21、11/2
1931～ 1932	昭和 6～7		●原撰祐著『日本粘菌目録』（応用動物学雑誌）	抜刷	347		
1932	昭和7	714	大阪大演習で天皇来阪、侍従に30種進献（小峠） 熊楠からの13点含む	日記		サビ菌等微小菌類の 標本と寄生リスト作 成	『博物科叢話』
		1213		〃			小峠に粘菌送付
1933	昭和8	329		〃			神戸の小峠宅訪問
1935	昭和10						『四山原植物目録・粘 菌』43種記載

★「採集数／目録」は文字が公開された目録での種類、普通字は日記記載の採集数

●原撰祐著『日本粘菌目録』の347種は、新種未登録、変種、異態などを含み多くなっている。

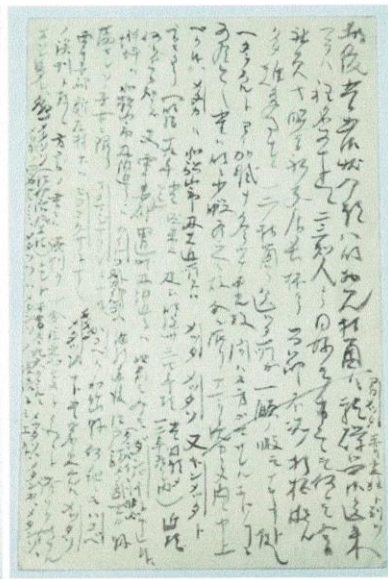
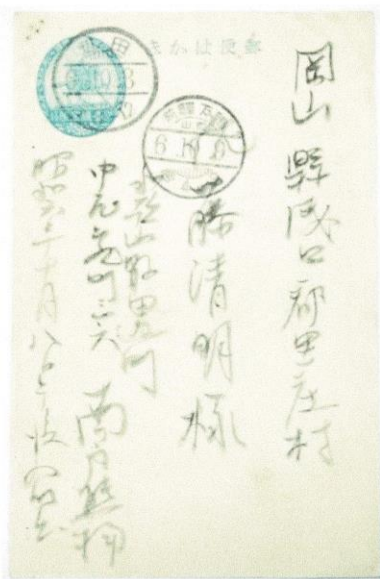
年が多い。1934 年は佐藤からの年賀状 1 通、1935 年はやり取りがなく、1936 年 12 月に佐藤からの書簡が 1 通あるのみである。これ以外の交流があるとすれば今後の調査を待ちたい。

佐藤が交流を始めた頃の熊楠は、前年、天皇を神島で出迎え、長門艦上での進講も無事に果たし、それなりの名声を得ていた時期で、4000 点強の採集菌類の同定と図譜の作成も亡くなるまで毎日続けた。1932 年には約 1500 にも及ぶ^{さびびょう}銹病などの微小菌類の標本と寄主リストも完成させていた。その一部を北海道大学の伊藤誠哉に送り、同定されたりしたが、それ以後の送付はうまくいかずに成果としてまとめるまでに至らなかった。その合間に民俗学の論考を書くなど、多忙な時期であった。

6. 佐藤からの粘菌送付と熊楠による指導と鑑定

(1) 第 1 回粘菌送來

日記では 1931 年 7 月 19 日に「粘菌 2 種」が佐藤から小包で届いた。これが第 1 回送來である。この 2 日前に手紙のやり取りがあったことから、佐藤からの送付予告とその了承だったと思われる。しかし熊楠は何らかの事情でこの「粘菌二種」の鑑定をすぐ行っていなかったようだ。おそらく佐藤は鑑定結果が知らされないままに不安を感じていたと思われる。この経緯を裏付けるような熊楠の佐藤宛ハガキが一昨年新資料として見つかった。これは日記での発信の記録がなく、記載漏れと思われる。その一部を下記に記す。(全翻刻は拙稿『熊楠ワークス第 63 号』(2024) 32~33 頁を参照されたし)



拝復 五日出御状今朝八時拝見。粘菌は頼贈品御送來あらば、種名可申上候。二三の知人にて同好のもの有之候も、何れも會社員や船會社の支店長忝なり。当節不況の折柄頗る多難多事申し候。一二の粘菌を送った所が一顧の暇もなきことと存候。へたをすとよい加減な名をつけ来る故、問はぬ方がまされるほどのことに可有之候。小生は時に少暇有之候故、分る限り、あまり晩からぬ内に申上べく候。(以下略)

(1931 年 10 月 8 日付佐藤宛熊楠書簡：南方熊楠顕彰館寄託所蔵)

「粘菌は頼贈品御送來あらば、種名可申上候」とあるのは、佐藤からの粘菌が届けば、鑑定するとの返事である。続けて熊楠は、二三の知人はこの不況時いずれも会社員や支店長で忙しいから「よい加減な名をつけ来る」「問はぬ方がまされる」と述べ、「小生は時に少暇」があるから、自分が同定しようとした。佐藤の「五日出御状」は粘菌を同定してくれる研究者を紹介してほしいとの内容だったのではないだろうか。日記での粘菌鑑定に関する記載は 10 月 16 日に「予は佐藤氏の粘菌鏡検」とあるのが初めてである。つまり、「粘菌二種」の鑑定をすぐ行っていなかったようなのだ。おそらく佐藤は同定結果が知らされないことに不安を感じていて「五日出御状」を書き、熊楠がこのハガキで返事したのではないだろうか。

(2)第2回粘菌送來と観察の様子

熊楠の10月8日付ハガキを受け、第2回送來となる「粘菌6種」が10月15日に届き、前述したように10月16日にまとめて同定を行った。熊楠はその観察の様子を書簡に認め、1931年10月16日、小畔四郎（以下、小畔）に送った。小畔は熊楠の研究協力者であり、いわゆる「粘菌学の三羽鳥」の一人である。ミクロの世界に入り込んだ熊楠がどんな観察をしていたかがわかるので引用する。

昨日備前国浅口郡より陳美品五個受け取る。その内の *Lamproderma arcyronema* Rost.のある者は茎に銀色の薄膜をかぶれること全く *Comatricha typhoides* Rostaf.に同じ。兎に角異態也。今後御注意を乞ふ。

（〔書簡 1259〕小畔宛熊楠書簡：南方熊楠顕彰館所蔵）

「異態」とは「変種」よりさらに変異が小さいものを意味している。翌日の17日も下記の書簡を小畔に認めた。

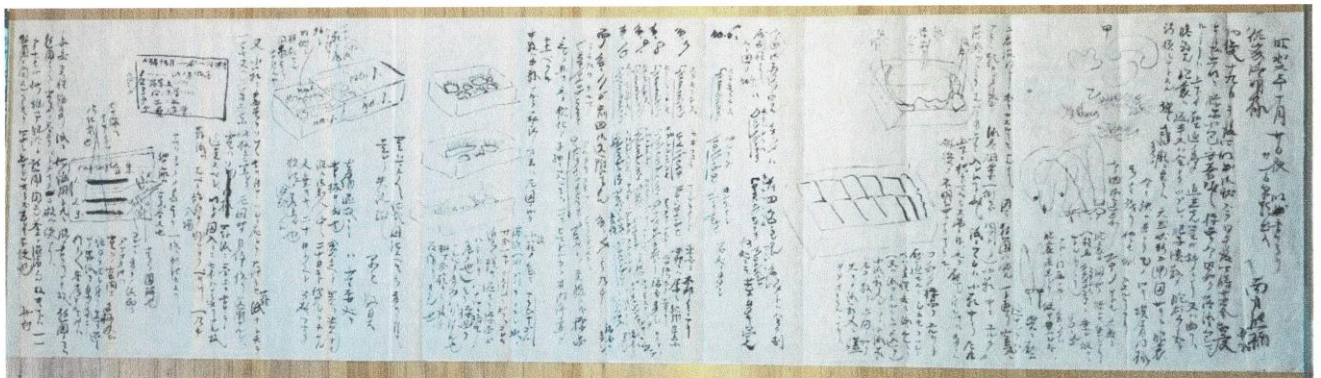
拜啓 昨夜、岡山県浅口郡里庄村産の粘菌五点を鏡検せり。何れも大陣笠と蔑視してかかりしに *Arcyria nutans* Greville の胞囊の頂上に〔図、「暗黒褐、黄土色」〕胞壁片が留まり存するものあり。一寸見には *A. oerstedtii* の如し、又一つは *Lamproderma arcyronema* Rost.の胞壁永存し、一寸は破れ、散せず。（色は飴の如く透視すれば紫色の淡きやうなり）それが茎の全面を被ひ茎の根本に達す。故に灯火に見れば〔図、「薄膜、薄膜」〕茎が紫光を放つ。扱胞子は普通のものは疣点の間無、漠然として明らかならざるに此の品のは〔図〕こんなに疣が大きく中には〔図〕とこんなに長き疣もあるなり。貴下はかかるものを見たることありや、伺い上るなり。

（〔書簡 1260〕小畔宛熊楠書簡：南方熊楠顕彰館所蔵）

手紙では「陳美品五個」「粘菌五点」、日記では「粘菌六種」と個数の違いは、送られてきた小箱が6箱、実際同定したら5種類だったからではと推測する。文中の「大陣笠」とは大きい「陣笠（雑兵）」、つまり、ありふれた粘菌の意味であろう。

(3)書状による粘菌学指導

この日の観察は深夜に及び、最後に佐藤への書状を認め、終了したのは朝の5時であった。この手紙が下記である。（翻刻は田村義也『熊楠ワークス第58号』（2021）32~35頁を参照されたし）



佐藤が研究をスタートするにあたり、最低限これぐらいの技術、知識を伝授したい

1931年10月21日付佐藤宛熊楠書簡（南方熊楠顕彰館寄託所蔵）

との思いが、この長い手紙を書かせたのだろう。その指導は、粘菌送付の際、圧迫せずにはかも動かないよう柔らかい薄紙で包み、紙巻き煙草のような小箱に収めること、そうした固定法には簡易法およびアラビアゴム固定法があること、発送時は大きな紙箱に小箱を並べること、ラベル・目録の書き方、活用法など、その理由も述べ、図も使って読み誤りが起きないように説明していることが見て取れる。ま

た粘菌の観察では胞嚢の形状、胞壁の色に着目して同定することや、すべての学名にルビがふられていること、粘菌のそれぞれに世界での分布も示されていることなど、若き研究者へのていねいな指導となっている。熊楠はその時の同定結果を日記にも記録しているので引用する。

夜佐藤清明氏備中国採集、本日送着の粘菌鑑定す。前日鑑定(1) *Arcyria nutans* Greville 里庄村 (2) *Ceratiomyxa fruticulosa* Macbr. (3) *Stemo. splendens* Rost forma *fenestrata* List. (4) 及び(11) *Lamproderma arcyriomema* Rost. var. nov.? *magnipnueta* Mina. 今夜鑑定(4a) *Dictydium cancellatum* Macbr. (5) *A. cinerea* Pers. (6) *Stemonitis pallida* 里庄村 (7) *St. uvifera* forma *macropora* Macbr. 里庄村 (8) *St. splendens* 里庄村 (9) *St. splendens* forma *fenestrata* List. 玉島町 (10) *St. splendens* var. *flaccida* 玉島町 甚だ面白き態也(図) 以上十一品備中国産。右査定の結果を佐藤氏への状に認め、五時臥す。

(1931年10月20日日記)

(4)日記記載の学名と第1~4回送來の関係

学名の前につけられた数字(1)、(2)は日記に7月19日送來とある「粘菌二種」、(3)~(8)は書簡の内容を吟味したところ、日記に10月15日送來とある「粘菌六種」、(9)~(11)は10月20日日記の「午後五時着小包一粘菌」とみてほぼ間違いないだろう。つまり、粘菌の送來はこの間、7月1回、10月に2回、計3回あったことになる。特に標本(4)は10月20日にも再送されているが、前回送來の(4)が今回送來の(4)と別属別種だとわかり、今回の方は(4a)と書いて区別している。また、前回の(4)は今回の(11)に同じと判定された。

11月2日の日記には小包着「玉島産 *Stemonitis splendens* var. *flaccida*」とある。これは第四回送來と考えてよいだろう。

熊楠が交流した国内における粘菌研究者たち

熊楠は幾人かの粘菌研究者を育てた。小畔四郎、小畔の紹介で熊楠と知り合った新潟県出身の実業家である上松翁^{うえまつしげる}、横浜の平沼大三郎の三人は「粘菌三羽鳥」と呼ばれた。熊楠が平瀬作五郎とマツバランの共同研究を行っていることを知った平沼大三郎は一九二一年に熊楠に一八三六年に刊行された長生舎主人編のマツバランの品種解説書『松葉蘭譜』を贈り、それ以降熊楠と親交し、熊楠の研究を助けるとともに南方家に経済的な援助を行った。六鶴保^{ろくろうたもつ}は熊楠に粘菌標本を送り、一九二二年の日光調査にも参加した。一九二一年にライチョウの研究者である矢沢米三郎^{やざわめいさん}は熊楠と交流のあった民俗学者の胡桃沢勘内^{くるみざわかんない}の仲介で山梨県内の粘菌を採集し、標本を熊楠に届けている。(略)

熊楠は当時の著名な粘菌分類学者で、昭和天皇の御用掛を務めた生物学御研究所の服部広太郎と江本義数とも交流している。

またその一方で地方の粘菌研究者で熊楠と交流のあった人物には宇都宮高等農林学校の菊池理一とその弟子中川九一がいる。

郷間秀夫.“南方熊楠と同時代の生物学者たち”『南方熊楠の生物曼荼羅』志村真幸編。三弥井書店、2024、p.235より引用

7. 熊楠と小畔の指導

(1) 鑑定は熊楠から小畔に

熊楠が直接鑑定する指導スタイルに変化があった。佐藤自らが同定しやすいようにと標本寄贈を小畔に指示し、粘菌送付先は小畔宛としたことである。それを依頼した 1931 年 12 月 5 日付書簡を引用する。

貴下もし暇ならば粘菌毎属一二種づつ凡そ四五十品、撰集して

岡山県浅口郡里庄村 佐藤清明氏え

おくりやり同時に一書を副え、南方は目下甚だ多忙なるに付き拙生(小畔)其委嘱により粘菌属一派を示すべき撰品をおくる。以後の御集品は当方(小畔)え御送来あらば、大抵のものは当方にて鏡検の上種名を申し上げ候。判断難きものは南方え当方より稿認め、拝読の上報告すべし。と記して一書出しおき下され度く候。此人は甚だ細かに集むること、かの菊池理一君同様の人に御座候

(〔書簡 1274〕 小畔宛熊楠書簡：南方熊楠顕彰館所蔵)

この書簡で、熊楠は佐藤を「此人は甚だ細かに集むること、かの菊池理一君同様の人」と評価している。菊池理一(1899-1971)は、1929年に熊楠が昭和天皇に粘菌標本を天覧に供した際の粘菌献上者の一人で、日記によると 1933年9月29日に南方邸を訪問している。熊楠が佐藤を菊池という人物に例えたことは、熊楠の信頼を得ていたと言ってよいだろう。

(2) 続く熊楠の指導、そして佐藤の「念願」

粘菌送付は小畔宛になったが、熊楠と佐藤の書簡のやり取りは続いていた。1932年2月2日着佐藤からの書簡の大部分は方言に関するもので、粘菌については文末に今後の採集への意欲を記したのみである。ところが、1932年7月2日着の佐藤書簡はかなり長い手紙で内容も多岐にわたっているため、粘菌に関する部分と研究姿勢に関する部分4箇所を抜き書きして示す。

- ①「粘菌目録に関し御教示に接し重ねて厚く御礼申上候」
- ②「小生の念願は植物分類なら分類でただ禾本科とか菊科とかのみに詳しく計りでは初等教育者としては不十分にて藻でも菌でも皆目にあたる一通りのものは解説し得る力を得ざれば教育もヘチマも無く先生と呼ばれる価値少しと存じ候」
- ③「当岡山市では粘菌なぞ採る者は一人も無く候。目下小生の採集は少く候へ共採れるだけは採り度く、リスターの書も着き候間これを見てボツボツやり度く候。しかし一度御口授を得たく候も何分生活に追われて寸暇なく全く困り居り候」
- ④「粘菌目録は何とかして手に入れ拜見可仕候」

(〔来簡 2317〕 熊楠宛佐藤来簡：南方熊楠顕彰館所蔵)

①で「粘菌目録」について教示されたことへの御礼を述べ、④ではその「粘菌目録」を何とか手に入れて拜見したいと記している。この「粘菌目録」とはどんなものか。手がかりとなるのが、1932年7月23日午後1時前(葉書)の上松翁宛書簡で、次に引用する。上松は「粘菌学の三羽鳥」と呼ばれる熊楠の研究協力者の一人である。

今朝やつと原氏の粘菌目録一部(六冊)手に入れり。貴下へ直送せんと思ふがもはや貴下手に一部入た事なら、他の粘菌篤志家へ送らんと思ふ。故に此のハガキ御入手後早速まだ手に入らぬか否を御一報被下度候、然る上早速御送上候 早々敬具

(南方熊楠『門弟への手紙—上松翁へ』(1990年)175頁)

熊楠は佐藤への手紙で「粘菌目録」を送るつもりで教示したと思われるが、実際は捜しても残部が見つからなかったようで、上記のような上松への問い合わせになった。やりくりできれば粘菌篤志家(佐

藤)へ送りたいとの手紙である。この「粘菌目録」と熊楠が佐藤に教示した「粘菌目録」は手紙の時期、内容から判断するに同じものであろう。これは原撰祐(はらかねすけ)(1885~1962)が熊楠の指導の下、『応用動物学雑誌』(1931年~1932年)に発表した6回連載の「日本粘菌目録(1)~(6)」のことである。原撰祐は菌学、植物病理学の研究者で、熊楠とは親交があった人物である。この目録での収録粘菌は347点だが、学名登録していない新種や異態が多く含まれている。しかし、学名、参照文献、出典、採集地、生息場所、採集者などが記載されているので、佐藤にとっては日本産粘菌の全体像を知るのに役だったに違いない。

1932年7月26日の日記に「午後四時五十分出 佐藤清明 書留小包一『応用動物学雑誌』 原氏の日本粘菌目録出たる分六冊」とあるので、目録は佐藤のもとへ発送されたとわかる。

次に③で「リスターの書着き候間」とあるのは、リスターの『粘菌モノグラフ (A monograph of Mycetozoa)』が手に入ったとの意味であろうから、これ以後佐藤自身が本を手にとって粘菌を同定するのに役だったに違いない。また、その書簡前段で「岡山市では粘菌なぞ採る者は一人も無く候」とあることから、相談できる知人が多かった高等植物とは違って孤独な研究環境を吐露している。

②は佐藤にとっての粘菌研究の意義を述べた部分である。つまり高等植物に詳しいだけでは生物の教師としては不十分で、藻、菌(粘菌)であっても一通り解説できてこそ先生であるとの決意で、これこそが佐藤が粘菌学を学ぶ意味であり、教師としての矜持をここに読み取ることができる。

(3)「進献粘菌目録」と小畔への粘菌送付

小畔は、天皇が1932年11月10日から「特別大演習」の統監で大阪へ来ることを知り、熊楠から粘菌14点を送ってもらい、自分の16点と合わせて30点の標本を14日に献上した。その時作成されたのが「進献粘菌目録」で、その写しは熊楠にも送られた。11月24日の日記に「夜十時頃出す 佐藤清明 進献粘菌目録」と記されている。これは熊楠がその小畔からの「進献粘菌目録」を佐藤に送ったことを示している。

1932年12月13日の日記で「午後五時着 佐藤清明ハ一 十二日出 粘菌標品凡二十四箱小畔氏へ送ると」と記されている。佐藤は熊楠の指示通り、新たに採集した粘菌を小畔に送付したことをハガキで知らせてきたのである。24箱の標本はかなりの採集成果である。その同定結果が小畔から南方に届いたことは、同年12月21日の日記に「午後四時十分着 小畔四郎状一 二十日出 佐藤清明氏より送られたる粘菌二十四点目録(小畔氏審査)」と記されていることから分かる。下記にそれを引用する。書き始めの2行はメモ書きのようだが、番号15の「Do」はイタリア語で「同上、同前」の意味と思われる。

? 23 系状体の下部は勿論、中央部区 smooth few C.30, mostly

? 32 var. *alpurenium* の図の如きも tibs は C.40

14 *Stemonitis splendens* Rost. 15 Do 17 *Ceratiomyxa fruticulosa* Macbr. var. *flexuosa* Lister 19 var. *porioides* List. 23 *Arcyria cinerea* Pers. 24 *Lycogala epidendrum* Fr. var. *tessellatum* List.

28A *Dictydium cancellatum* Macbr. var. *fuscum* List. 28B *Stem. splendens* Rost. 31 *Stem. splendens* Rost. var. *flaccida* List. 32 *Dictydium cancellatum* Macbr. 33 *Tubifera ferruginosa* Gmel. 36 *Fuligo septica* Gmel. var. *rufa* R.E.Fr. 37 *Lindbladia effusa* Rost. 40 *Lycogala epidendrum* Fr. 41 *Physarum nucleatum* Rex. 42 *Dictydium cancellatum* Macbr. 43 *Arcyria denudata* Wettst. 45 *St. splendens* Rost.

46 *St. splendens* Rost. forma *fenestrata* List. var. *webberi* List. 47 Unripe *Ceratiomyxa fruticulosa*

Macbr. 48 *Stem. splendens* Rost. var. *flaccida* List 49 *Stem. splendens* Rost. 50 *Ceratiomyxa fruticulosa* Macbr. var. *flexuosa* List. 51 *Comatricha elegans* List. & *Comatricha nigra* Schroeter

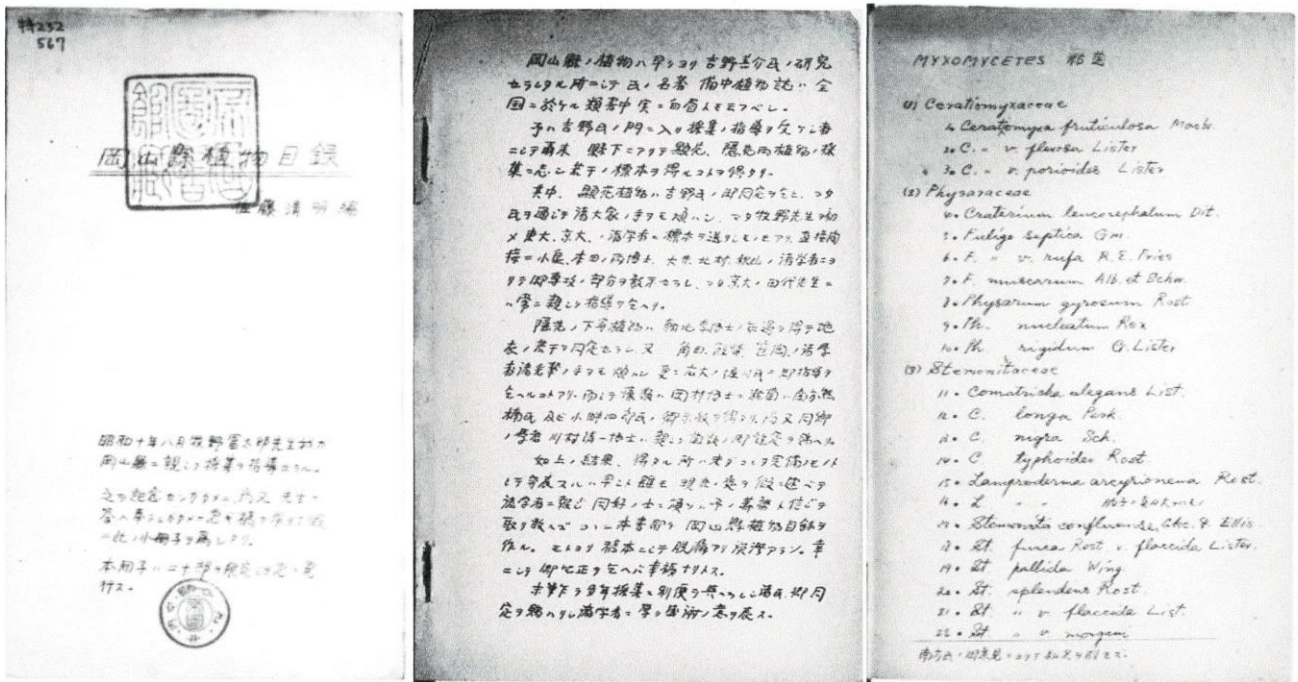
(1932年12月21日日記)

「二十四点目録」がNo.14から始まっていることから、前章の(4)で述べた1931年11月2日の第四回目送來はNo.12、No.13の2種だったと推測できる。また、この目録で番号が飛んでいるのは、佐藤は採集品を全て送付したわけではなく、ある程度選別していたようだ。その理由としては、自ら同定したためか、あるいは送付するには不十分な標本と判断したためか、などが考えられる。

8. 佐藤の「岡山県産粘菌目録」

(1)「粘菌目録」の完成

日記に1933年3月29日「午後二時十五分着 小畔四郎状一 二十八日正午出。二十七日に佐藤清明氏來訪」とあり、佐藤が神戸の小畔を訪ねたとわかる。その後、1936年12月1日の日記に「[受信] 午後四時五十分着 佐藤清明」とある。この時の手紙で佐藤はこう述べている。「小畔先生に粘菌御指導願居候処標本の目録備忘用に作成致候条別便にて御目に掛け申候」と粘菌目録の完成を知らせ、また追而書きで「小畔氏へも一部輯送仕りおき候」と述べている。ここにやっと岡山県産粘菌目録が完成した。「別便」とあるが、日記にはその受信の記録がなく、顕彰館の資料にも見あたらない。したがって、



上図3枚は国立国会図書館デジタルコレクション『佐藤清明「岡山県植物目録・粘菌」(1930)』より引用

「別便」で送付されたはずの岡山県産粘菌目録の内容を他の資料から探って見ることにする。

佐藤に関する他の資料から、粘菌目録には下記の二つが知られている。

- ① 佐藤清明. 1935年. 岡山県植物目録・粘菌. リムルス学会
- ② 佐藤清明. 1937年. 岡山県産粘菌標本目録. リムルス4巻3号

ここでは国立国会図書館デジタルコレクションで参照できる①の『岡山県植物目録・粘菌』を参考に

する。目次は双子葉類から始まり、一番最後の粘菌類は「粘菌類 (8科 14属 43種)」となっている。佐藤はわずか三、四年で43種の粘菌を採集したことになる。佐藤はこの冊子の謝辞で「粘菌は南方熊楠氏及び小畔四郎氏の御示教を得たり」と記している。粘菌ページの最後に「南方氏御意見によりて和名を附せず」と書かれている。これは、熊楠が当時の粘菌和名には命名の統一性がないことを指摘していたことによる。

佐藤が方言研究のかたわら、他の植物と並んで43種の岡山県産粘菌目録を作成できたのは、本人の粘り強い努力の賜物であり、熊楠と小畔らとの交流がそれを後押ししたと言えるだろう。佐藤が書簡で語っていたように高等植物から菌(粘菌)まで生物教師として「一通りのものは解説し得る力」を得たいとの思いはここに結実した。

(2)山本ら「佐藤清明氏採集の岡山県産変形菌」と熊楠日記の粘菌との比較

山本幸憲・藤岡佳代子(2002)によれば、佐藤の「標本の詳細については長い間不明であったが、最近になって標本の一部の所在が判明した」という。つまり佐藤の粘菌標本は存在していたのである。そこで、「虫害にあった」ものや、県外のものを除外し、再鑑定を行ったところ、全20種が確認できたとのことである。そのリストでは標本番号が断続的に2~109まで、同定された標本数47点(重複も含んでいるため種類は20種)、採集日は1931年6月から1934年7月28日までと確認されたという。山本らのリストは学名(和名)毎にまとめられたため、標本番号順には並んでいない。リストにあるラベル番号の「KS」は「Kiyooki Sato」(佐藤清明)で、同定者の「Det. K. Minakata」は Determined by K. Minakata (南方熊楠)で、「Det.S. Koaze」は Determined by S. Koaze (小畔四郎)とのことである。

一方、熊楠と小畔同定による熊楠日記の粘菌は、1~51(欠番を含む)まで、採集年は1931年、1932年に限られている。したがって標本に含まれる1933年、1934年の採集については佐藤自らが同定していたと思われる。山本ら鑑定(2002)と熊楠日記の特徴を比較したのが下表である。

	山本らによる報告論文の標本と学名	熊楠の日記記載の学名
標本番号	「KS-002」~「KS-109」(欠番含む) ※学名毎にリスト作成	番号のみで「1」~「51」(欠番含む)
標本数 種類	鑑定標本 47点 種類 20種	※熊楠当時と現代では分類、学名に変更があるのでここでは集計しないでおく。
採集年	1931~1934年	1931~1932年
鑑定者	再鑑定 KS002~KS109 (山本ら)	1~13 (熊楠)、14~51 (小畔)

日記の番号「1~51(欠番を含む)」の学名とそれと比較できる山本らのリストによる番号「KS-002~KS-050(欠番を含む)」の学名が一致するかどうか調べたところ、対応する番号と学名が二、三の学名をのぞいて一致した。この二、三の違いは、山本らによれば最近の分類学的変更によると説明されている。つまり、熊楠、小畔が鑑定した日記の粘菌は、山本らが報告した標本リストと同じものだと判明した。(詳細な比較については拙稿「日記書簡にみられる南方熊楠と佐藤清明の交流-粘菌学指導を中心に-」(2024)、『熊楠研究18号』136~139頁)を参照していただきたい。)

山本らは「KS-086、クサムラサキホコリ」について「ほぼ完全に保存されていて、現在でも使用に耐

えるものである。本種はふつう地面や生きた草や落葉などに発生するが、標本は腐った畳の上で採集されている」と説明していて、標本作製上、そして生態的にみて興味深いものも含まれているようだ。

佐藤（1935）が作成した「粘菌目録」は43種であったから、山本らによって鑑定されなかった20余種の粘菌と多数の標本が作製されていたことになる。それらには多大な労力がいったはずで、佐藤の並々ならぬ根気と熱意があってこそ得られたものであり、熊楠らからの粘菌学指導も一つの原動力として挙げることはできないのではないだろうか。

おわりに

和歌山田辺と岡山の地にあった者同士が交流できたのは、桂が『岡山文化資料』を熊楠に送っていたことが大きな役割を果たした。民俗学面での交流の傍ら熊楠は、桂、佐藤たちと信頼に値する関係ができつつあると確信して、粘菌採集を依頼することになったと思われる。佐藤は、これを他の植物以上に採集・同定が難しい粘菌を自身の知識を深める絶好の機会と捉えた。岡山県産粘菌をできるだけ多く採集するとの志を立てたが、その原動力は、どんな生物であっても教師として生徒に一通りの解説ができる教師でありたいという強い使命感であった。

佐藤が粘菌を採集した時期は、1931年～1934年の4年間だった。熊楠の指導は、まず生息していた状態を損なわない送付の仕方や生息状態を記録する目録に関する指導などであった。また、同定して説明返却するだけでなく同定に必要となる、リスターの『粘菌モノグラフ (A monograph of Mycetozoa)』を入手させ、あるいは原撰祐の『日本粘菌目録 (1)～(6)』を自ら送って、佐藤の粘菌採集と同定、知識を得ることを手助けした。佐藤が粘菌の指導を受けていた頃、熊楠は多忙を極めていて、途中から粘菌送付先が小畔に変わった。佐藤が『岡山県産粘菌目録』を完成させたとき、教師としての念願はかなった。しかし、これ以降佐藤は粘菌の調査、研究に一区切りつける道を選んだ。

戦前、佐藤の研究分野は植物方言から妖怪まで、民俗学から生物全般と広範囲にわたっていたため、その業績は十分に評価されてこなかったと思う。しかし昭和初期の岡山県で、佐藤ほど多くの粘菌を採集し、粘菌目録にまとめた人物はいただろうか。しかもその当時最高の指導者である南方熊楠と小畔四郎が鑑定を行い、2002年の山本らによる標本の再鑑定でもさらに多くの日記記載(1～51)以降の種類が確認されている。これらを思う時、岡山県における粘菌学研究史において、佐藤清明の果たした役割はより高く評価されてしかるべきである。

佐藤にとって熊楠は粘菌学や民俗学だけを指導した人物ではなかった。書簡がほとんど残っていないので残念だが、7章(2)で紹介した「1932年7月2日着の佐藤書簡」の引用①の文は実は前半があったので下線で次に示す。

謹啓 先般はウエマツサウに関して御懇書に接し今回は又粘菌目録に関し御教示に接し重ねて厚く御礼申上候

この書簡の少し前、熊楠はウエマツソウについて丁寧な教示を行ったようだ。ウエマツソウは関東以西、四国・九州(沖縄)に分布、やや暗い林床や林縁などに稀に生える高さ6～10cmの腐生植物で、葉緑素は無く、夏に紫褐色～紅色の地上茎をだし、同色の雄花、雌花つける。佐藤は『博物科叢話』(1932)の中で、ウエマツソウの発見が植松氏、時久氏等によるとしたうえで「しかしこれより先き、紀州の南



那智山一の瀧、いわゆる「那智の滝」である。(2018年2月)筆者撮影

方熊楠氏は明治三十六年の七月といふに早くも那智山一の瀧に於て植松草を採集されている。」と書き及んだ。熊楠の方が2年早かったことになる。同様な表現が宇井縫蔵著『紀州植物誌』(1929)にあること、1931年末には本の脱稿はすんでいただろうから、時系列で考えると熊楠からの教示は出版以後になったと考えられるが、どんな話が語られていたのか興味深い。

熊楠は『南方二書』で希少な生物ほど開発で絶滅しやすいことを指摘し、神社林の重要性を説いた。また神島が天然記念物に指定された際には、「この島に何たる特異の珍草珍木あつてのことにあらず。この田辺湾固有の植物は、今や白浜辺の急変で多く全滅し、または全滅に近づきおる。」(1936、牟婁新聞)と語った。その森林全体を保護しなければならないとする考えは熊楠にも佐藤にも共通であった。佐藤が戦後、県内の天然記念物等の調査・保護に尽力したのは、熊楠の学問的姿勢や自然保護に対する熱意が大きく影響したのではないだろうか。

謝辞

本稿で資料とした日記は「1928(昭和3)年～1930(昭和5)年」は東京・南方熊楠翻字の会が、「1931(昭和6)年～1936(昭和11)年」は田辺・南方熊楠翻字の会が翻刻したもの(「昭和6年～昭和7年」は公刊、他は未公刊)を使わせていただきました。上松徹氏には南方熊楠顕彰館寄託所蔵の書簡2通、南方熊楠顕彰館にはミナカテルラ・ロンギフィラ粘菌図の掲載で、佐藤清明資料保存会の生宗脩一氏と杉井睦保氏、倉敷市立自然史博物館の学芸員江田伸司氏には資料の提供と問い合わせで色々ご配慮いただきました。以上の方々に深く感謝申し上げます。

参考文献(出典は主に文中に示したが、一部はここに示す。)

- (1)『南方熊楠全集』1巻、「田原藤太竜宮入りの譚」、平凡社、1971年
- (2)松本淳『粘菌～驚くべき生命力の謎』誠文堂新光社、2007年
- (3)山本幸憲・藤岡佳代子「佐藤清明氏採集の岡山県産変形菌」『変形菌』日本変形菌研究会編(20)、2002年
- (4)佐藤清明『博物科叢話』、「聖上陛下御専攻の生物」、「本郷草の発見物語」、文教書院、1932年

調査報告

虚空蔵山の植物 ～旧里庄美しい森を中心に～

理事 岡本泰典

はじめに

佐藤清明が初代会長を務めた岡山県植物研究会の会誌第1号（1982年3月）に、佐藤と安原清隆の連名による「県南里庄町の湿原フローラ」という報告が掲載されている（註1）。当時、里庄町内3か所に存在した湿原に生育する植物の目録と解説からなり、簡潔な報告ではあるが当時の湿原植生を知る上で貴重な情報源である。

佐藤清明資料保存会植物分科会では、佐藤らが調査した場所のひとつ、虚空蔵山の旧里庄美しい森（以下、「旧」を略）に着目し、前回調査から40年を経て現地の植生にいかなる変化が生じたかという問題意識に基づき、2021年から2024年まで現地調査を実施してきた。本稿は筆者が代表してその成果を紹介するもので、2024年10月19日の「清明を読む会」における筆者の発表資料に加筆・修正して作成した。

虚空蔵山と美しい森の概要

虚空蔵山は、里庄町と笠岡市・浅口市の境界に位置する標高262mの丘陵である（図1）。地質は近隣の応神山や毛野無羅山と同じく中生代白亜紀の花崗岩からなる（註2）。花崗岩は深層風化によって粗粒な真砂土となり、栄養分の乏しい土壤が形成されている。

虚空蔵山の歴史については文献資料が少ないが、ここでは戦後の変遷をたどってみたい。1947年（昭和22年）の航空写真では、樹木はまばらで山肌が露出した部分が多い（註3）。その後は森林が回復していくが、1970年（昭和45年）2月18日の山火事で約120ヘクタールを焼失した。1975年（昭和50年）頃から松くい虫予防剤の散布が始まり、2018年（平成30年）6月まで継続した。昭和50年代以降、各種の開発が盛んとなり、1980年（昭和55年）から1982年（昭和57年）に虚空蔵公園の整備、1978年（昭和53年）から林道虚空蔵山清水線の工事が始まり1982年（昭和57年）3月に開通した。1993年（平成5年）に、南向き尾根筋に立地する鳶尾城跡に銀寿観音が建立された。1995年（平成7年）には「里庄美しい森」が完成し、遊歩道、ビジターセンター、キャンプ場などが整備されたが、利用者の減少により2019年（平成31年）3月末をもって閉鎖された。

今回、植物調査を行った美しい森は、北向きの谷筋に並ぶ溜め池群の周囲、標高200～240mの位置に造成されている。溜め池の名称は北から順に池口長惣下池、池口長惣上池、長惣下池、長惣中池、長惣上池である。これらの池の築造年代は定かでないが、1895～98年の地形図には既に図示されている（図3・註4。ただし北端の池口長惣下池・上池は一つに描かれている）。南端にある長惣上池は現在、埋没して湿地（湿原）化している（図4）。

虚空蔵山の植生と既往の植物調査

虚空蔵山の植生は、山麓部を除く大部分が、植生図に「アカマツ群落」ないしは「ネズーアカマツ群落」として示されている（註5）。また、美しい森の大部分はアカマツ群落として図示されている。戦前の『浅口郡誌』にも松が繁茂と記録されており（註6）、長年維持されてきたアカマツ林であるが、近年はマツノザイセンチュウの被害によって衰退傾向が著しく、植生図とは乖離が生じつつある。山麓にはアベマキ・コナラ群集や竹林、田畑雑草群落などがみられる。

虚空蔵山における植物調査は、全域を対象としたものではなく、佐藤の『浅口郡植物誌』（註7）にも目立った記述はなく、上述のように1982年に佐藤・安原によって「里庄町の湿原フローラ」として報告されたものが唯一である。同報告にある里庄町内の3か所の湿原のうち2か所（A・B）は虚空蔵山に位置し、Aは美しい森内の溜め池に相当し、Bは鳶尾城跡の麓にある池とされている。湿原フローラという題目ではあるが、実際には周辺の草地や森林の植物も含まれており、Aについてはほぼ、美しい森に相当する区域と考えてよいであろう。以下、この報告に言及する場合はA湿原（美しい森）を指すものとする。この報告では、45科77種の植物が掲載されている。

なお、佐藤らの調査の時点で帰化植物が侵入してきており、その原因を1970年の山火事（による裸地化）に求め、当時行われていた森林公園と林道の造成工事により、将来的に植物相の変化がある可能性を指摘している。

調査の方法

佐藤清明資料保存会植物分科会による今回の調査は、美しい森およびその外周道路沿いを対象に、真夏と真冬、悪天候時などを除いて、清明研究会開催日の午前実施し、確認した植物を記録・撮影・採集するという方法で行った（図5）。現地調査は2021年12月から2024年9月までに12回実施し、採集した標本の一部は倉敷市立自然史博物館に寄贈している。調査参加者は生宗脩一・伊藤智行・稲田多佳子・岡本泰典・佐藤健治・佐藤美清・佐藤泰徳・高橋達雄・徳山容・中尾茂男・西崎康男・安原清隆の12名（50音順）である。また、個々のメンバーによる個人的な調査も随時実施した。調査は園内の遊歩道沿いを中心に行ったが、厳密に園の敷地内にはこだわっていない。一方で、池の水中や湿原内部など、立ち入りが困難で十分な調査ができていない場所もある。

植物調査の結果（暫定版）

現地調査の結果、62科131種の植物が記録された（一覧表は省略）。これは佐藤・安原報告よりも大幅な増加であるが、調査範囲・回数とも今回のほうが上回っていると考えられるため、単純な比較は難しい。前項で触れた調査範囲の制約のほか、イネ科・カヤツリグサ科・ホシクサ科など分類の難しいグループが手薄であること、また全ての植物について専門家による同定を受けているとは限らないことも明記する。今後も追加調査を行えば、この数値は増加する可能性が高い。

以下、美しい森の植生の特徴について判明したことを簡単に列記する。

- ・虚空蔵山全体の傾向と同じく、かつて優勢であったアカマツは減少し、コナラを中心とする落葉広葉樹林が拡大しつつある。
- ・土壌が乾燥しがちな花崗岩の真砂土であるため、湿潤な環境を好むシダ植物の種類は少ない。一方、このような環境を好むコシダ（図6）が多く見られた。
- ・アカマツは少なくなっているが、アカマツ林にしばしば伴うコバノミツバツツジや、ツクシハギ・コガンピ・ワレモコウ・オミナエシ・キキョウ（図7）など、明るく開けた場所を好む低木や草本が確認された。
- ・キャンプ場跡地や池の堤などには、在来の雑草のほかに、前回も記録されているメリケンカルカヤを含め、帰化植物の侵入が確認される。ただし、在来の植物をおびやかすというほどではない。
- ・木本には、植生回復のための植樹に由来する外来種や、在来種であっても植栽に由来する可能性があるもの（ウバメガシ・ヤマモモなど）が含まれる。
- ・長惣上池は、土砂の堆積によって埋没し、小規模な湿原が形成されている。この湿原の成立時期は明らかでないが、周囲がアカマツの疎林であった時期に、貧栄養の真砂土が流入することで形成されたのであろう。湿原内には県南部では少ないオオミズゴケや、食虫植物（モウセンゴケ・イシモチソウ・ミミカキグサ・ホザキノミミカキグサの4種）も含めた各種の湿地性植物が少ないうちながらも生育し、世界最小のトンボであるハッチョウトンボも生息している。
- ・岡山県レッドデータブック（註8）掲載種は、サギソウ・ミズトンボ・イシモチソウ（図8）の3種（いずれも準絶滅危惧）で、長惣上池の湿原とその周辺で見つかった。なお、筆者は1982年の春に、美しい森に相当する場所でエヒメアヤメ（県RDBで絶滅危惧Ⅰ類）を目撃している。その後は記録がなく絶滅した可能性が高い。

前回調査時に比べて最も顕著な変化と考えられるのはアカマツ林の衰退と、コナラなどの落葉広

葉樹林の拡大であろう（ただし、佐藤・安原報告では森林の樹種については言及がない）。湿原の植物については、前回の報告にある種で確認できなかったものがある一方、新たに確認できたものもあった。食虫植物は前回と同じく4種が確認できた。湿原の植物は意外と残っていたという印象であるが、カキラン・トキソウ・サワギキョウといった美しい花を咲かせる湿地性植物が見られなかったのは残念である。

今後、美しい森が再整備されずこのまま推移するなら、アカマツ林の衰退と落葉広葉樹林の拡大、そしていずれは常緑広葉樹林へという植生遷移に伴って、明るい開けた場所を好む植物は徐々に衰退していくと予想される。これはまた、陽地を好むものが多い帰化植物も衰退していくであろうことも意味している。一方、湿潤な場所を好むシダ植物などは増加していく可能性が高い。湿原についても、周辺の森林化に伴って内部の乾燥化と富栄養化が進み、現在の植生が徐々に変化していくことが予想される。

おわりに

今回の調査は、専門家を含まないメンバーによる、虚空蔵山の中でも美しい森というごく一部の区域を対象にしたものにすぎない。その制約の中ではあるが、結果として県内の一般的な傾向と同じく、アカマツ林から落葉広葉樹林へという植生の変化、また湿原には食虫植物を含む特徴的な植物が残存していること等が確認でき、一定の成果はあったと考える。今後は専門家による現地調査と過去の標本調査を含めた、より精密な植生調査の実現を望みたい。

結びにあたり、3年近くに及んだ現地調査を遂行された佐藤清明資料保存会植物分科会の皆様、また清明を読む会での発表に際し多数の植物写真をご提供いただいた徳山容氏に篤く感謝申し上げます。

註

- (1) 佐藤清明・安原清隆1982「県南里庄町の湿原フローラ」『岡山植物研究会会誌』第1号
- (2) 産業技術総合研究所地質調査総合センター「地質図Navi」<https://gbank.gsj.jp/geonavi/>
- (3) 国土交通省国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」
<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>
- (4) 埼玉大学教育学部 谷謙二「今昔マップon the web」<https://ktgis.net/kjmapw/>
- (5) 環境省自然環境局生物多様性センター「自然環境調査Web-GIS植生調査(1/2.5万)第6・7回植生図」<http://gis.biodic.go.jp/webgis/index.html>
- (6) 浅口郡誌編纂係編1925『浅口郡誌』浅口郡役所
- (7) 佐藤清明1932『浅口郡植物誌』リムルス学会
- (8) 岡山県野生動植物調査検討会編2020『岡山県版レッドデータブック2020植物編』岡山県環境文化部自然環境課



図1 虚空蔵山遠景

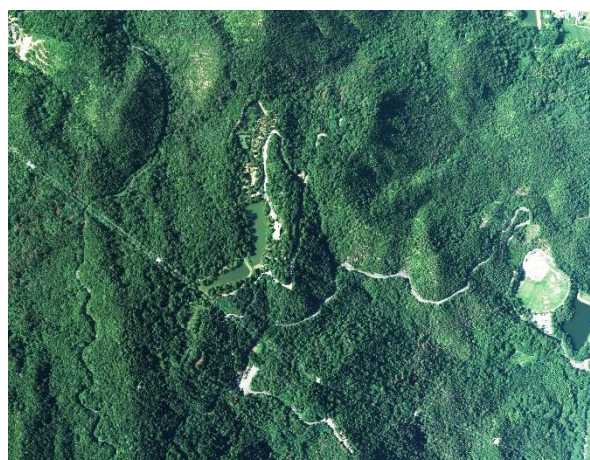


図2 「美しい森」周辺の空中写真(2007)

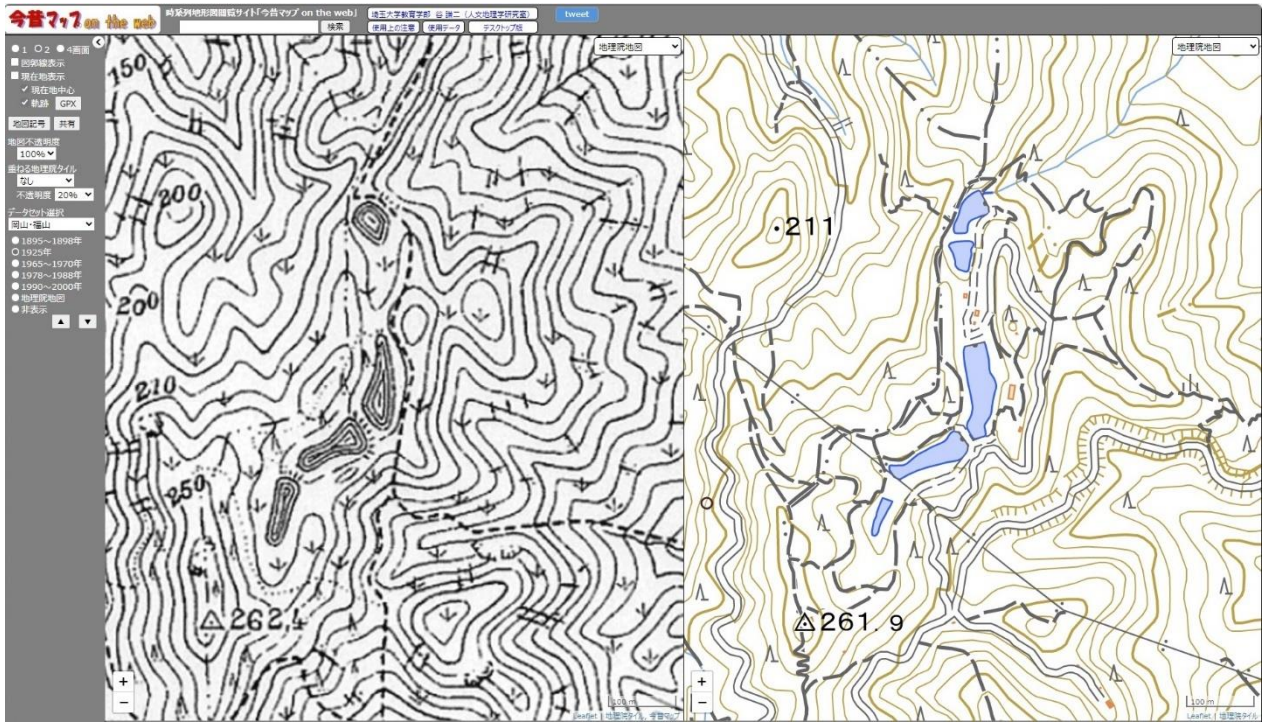


図3 美しい森周辺の地形（左は1895～98年、右は現在。註4より）



図4 長惣上池の湿地



図5 植物調査の様子



図6 コシダ（徳山容氏撮影）



図7 キキョウ（徳山容氏撮影）



図8 イシモチソウ（徳山容氏撮影）

資料① 地元紙「山陽新聞」に掲載された「菊桜保存育成活動」にかかる紹介記事と
読者投書欄「ちまた」に寄せられたメッセージ

<記事>

掲載日	見出し・キーワード等	取材対応
2022. 5. 15.	菊桜に愛着持って 里庄出身の博物学者 佐藤氏ゆかり顕彰団体が保存会 24年植樹祭で皇后様お手植え	生宗脩一・佐藤健治 高橋達雄・西崎康男
2022.12.11	菊桜に関心深めて 岡山大の案内看板更新	佐藤健治・徳山 容 生宗脩一
2023. 8.12.	菊桜 岡山と皇室結ぶ 六高から里庄へ 住民ら守り育てる 「岡山県立博物館特別展 池田厚子さんゆかり菓子器の「お印」	佐藤健治・生宗脩一 佐藤美清
2024. 2. 2.	菊桜 学校や公園に植栽 地元出身博物学者佐藤清明氏ゆかり 全国植樹祭へ 町内8カ所	町長・里庄東小学校長 児童代表2名
2024. 4.22.	気品漂う菊桜見頃 地元出身学者 佐藤氏ゆかり	生宗脩一・佐藤健治 高橋達雄
2024. 5. 6.	植菊桜知って 里庄出身・博物学者佐藤清明さん保護尽力 地元グループ 「冊子・リーフレット」作成	徳山 容・小野礼子 稲田多佳子・高橋達雄
2024. 8.24.	両陛下お手植え苗木の定植地決定 県総合グラウンド、県北3市へ 「全国植樹祭岡山県実行委員会」	
2024.11.13	植樹祭で両陛下お手植え苗木を市長ら定植 蒜山 ※ヒノキ・キクザクラ	

<投書欄「ちまた」メッセージ>

2024. 8.24.	ちまた欄縁 菊ザクラ出合え感謝	岡山市 44歳女性
2024.11.13.	亡父広めていた菊桜知って	井原市 69歳女性

資料② 第74回全国植樹祭天皇皇后両陛下お手植え苗木の定植地等

定植場所	定植する苗木	定植時期
岡山県総合グラウンド	アカマツ・クロガネモチ	11月5日(火)
風のパレット HIRUZEN(真庭市)	少花粉ヒノキ・キクザクラ	11月10日(日)
大ヶ山牧場跡地(津山市阿波)	少花粉スギ	10月19日(土)
おおさ総合センター(新見市)	アテツマンサク	10月13日(日)

(資料ご提供：全国植樹祭岡山県実行委員会事務局)

<編集後記>

この度、ご縁をいただき「田辺・南方熊楠翻字の会」の大内規行氏からご寄稿を賜りました。私どもに新たな地平をもたらして下さいましたこと感謝です。また記録資料として、皇后陛下雅子様お手植えの「菊桜の苗木」が蒜山高原の一角に無事定植されましたことを機に、私どもの菊桜保存育成会の活動を精力的に取材して下さった山陽新聞の一連の記事のリストを掲載させていただきました。加えて同紙の読者投書欄「ちまた」には、記事を見て「菊桜展」に足を運ばれたこと、読者の父親が佐藤清明とともに菊桜を広める活動をされていたことなどが記されています。それぞれの記事の掲載日を記載しておりますので、お役立て頂ければ幸いです。(会報担当・佐藤泰徳)

佐藤清明顕彰特設サイト



佐藤清明資料保存会会報 No.13

発行日 令和6年12月21日

発行者 佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館

会長 加藤泰久(里庄町長) 館長 田中孝治

住 所 719-0301岡山県浅口郡里庄町里見2621

電 話 0865-64-6016

ホームページ : <http://www.sl-net.town.satosho.okayama.jp>

Eメール : sl-net@sl-net.town.satosho.okayama.jp